現代社会を『関係性』という観点から考える

㉔　「知らないことが不安や排除につながる」ということ

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

連載 14 では**『「開く」ことと「閉じる」こと』**について書かせていただきました。

その後、連載 15 では**『つながりが支えるこころ』**と題して、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となり社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継いで、**『「見える」ことと「見えない」こと』**という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えてきました。それを受けて連載 17 では、これまで述べてきたことを踏まえ、**「地域社会」との「関わり方」を考える**というタイトルで、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

つまり、**「地域社会」で生きるということ**、について考えてきたともいえます。また、現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあります。例えば家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。これに関しては連載 19 で**「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ**というタイトルで問題提起をさせていただきました。連載 19 回では**「自分は誰かとつながっている」という感覚**を持つために私が必要だと痛感している**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**について、連載 20 では、**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**というタイトルで、コロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について、連載 21 では、**Society から Home へ矮小化していく社会**について述べさせていただきました。

連載も 5 年を超え、コロナ禍はじめ連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も、自身の専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだこと、触発されたことをこの連載原稿に落とし込んでいきたいと考えています。

連載 23 では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる**「家族助」**についてというテーマで、現在議論されている地域包括ケアシステムの在り方について私論を述べました。

連載 24 では**自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさ**というタイトルで、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他性」につながることなどについて私見を述べさせていただきまし

た。
連載 25 となる今回は、**「知らないことが不安や排除につながる」ということ**をテーマで私見を述べたいと思います。
連載原稿として一定の一貫性は保持したいと考えており（現代社会における関係性に関する考察という観点を大切にすることが主目的)、冒頭でこれまでのテーマを振り返ることが必要と考えており、連載 14 以降では、これまでの連載をまとめる短い文章を記載していることを御了解ください。

1　地域コンフリクトはなぜ起きるのか

薬物依存症者等施設を始めとしてとする地域生活の場や施設が、「自分たちの居住エリア」に設置されることになった場合、「自分と異なる人たちが集まる、あるいは居住する施設」が「自分たちの居住エリアに入ってくる」ことの恐れなどの感情から、往々にして地域コンフリクトが発生することがあります。私自身も、関西方面で初めて設置されたダルクで理事をしていたこともあり、施設の移転などの際にそうした厳しい状況に直面した経験あります。
昨今では、児童福祉法の改正に伴って特別区が児童相談所を設置できるようになった際、東京都内のある特別区が児童相談所の設置を計画した時、設置予定地域で激しい反対運動が起き、全国レベルのニュースにもなりました。「ネギすら高級スーパーで購入するようなこの地域に、そうした施設を必要とする人々が来られても、その人々も環境の違いに戸惑われるだろう」という内容の、当該「地域住民」の声が報道された時には、「無知と無縁は人を歪ませる」という、北九州でホームレス支援を長年なさっている奥田仁志氏が、その経験からよく述べられる言葉を思い出しました。
上記児童相談所設置の際の反対運動については、当該地域住民の方全てがそうした排他的な意識を持っておられたわけではないはず（と信じたい）ですが、こういった場合は、どうしても「声の大きな人々の声」が報道されることもあるのだと感じました。また「ネギすら高級スーパーで云々」という言い回しはいかにもキャッチーであり、そうした「強い言葉」が関心を集めた面もあったと考えられます。
私自身は、こうした地域コンフリクトの多くは、「知らない」こと、そして、歪んだ「我々意識」が背景にあると考えています。

2　歪んだ「我々意識」

多様性が重んじることを目指す（SDGs など）社会にあってなお、自分の周囲の人々や環境に同質性を求め、「異質である」を感じたものを排除しようという考え方は、残念ながらまだ残っていると上記の一件でも感じました。ある意味これは歪んだ「我々意識」とでも呼べるものだと私は感じています。
同じ属性や志向を持つ者が集まり、その同質性を核として結束力を高めていくということは、仲良しグループがいわゆる「おそろい」の文房具やアクセサリーを持つことでその同質性を外部にアピールすることなど、比較的幼い世代でも見られる現象だと考えられます。一見すると無邪気で微笑ましいことでもありますがが、「自分たちとは違う」ものに対し、排除の方向に傾いていくものであれば、それは「いじめ」その他の問題・課題に発展してしまうでしょう。
子どもの行動は大人の考え方を映す鏡のような側面を持つと考えています。仲良

しグループの無邪気なふるまいと微笑ましく考えるだけではなく、「自分とは違うもの」に対する排他的態度につながる芽を含みかねないことについて、周囲の大人は注意を払う必要があります。

実際、同質性を求められることに違和感を感じ（あるいは同質性を示すモノを購入することに心理的・経済的な負担があって）、しんどさを感じていても、そのグループから抜けられないということもあるでしょう。

「スクールカースト」という言葉が登場して久しいですが、世界史の授業でインドにおけるカースト制度を教わった私としては、そうした言葉が日本の学校で日常的に使われる言葉となったことに驚きを禁じ得ませんでした。そして「カースト」から落ちないために、「自分の本当に好きなこと」ではなく、「グループやそのリーダーと同じようにふるまうこと」に力を注ぐことによって消耗しているのであれば、それは現代の若い世代の「生きづらさ」につながっていくでしょう。

「わたしたち」「我々」という言葉はよく使われますが、実はその定義は曖昧です。自分たちと同質のものだけを「わたしたち」「我々」としているのでれば、それは連帯の名前に借りた、異質なものを排除することに他ならないと私は考えます。

読者の皆さんはどのようにお考えですか。

3　ドキュメンタリー映画『不安の正体～精神障害者グループホームと地域』

今回、このテーマで執筆させていただくにあたって、上記ドキュメンタリー映画を取り上げたいと思います。内容等の紹介がやや長くことについてお許しください。

これは2021年に、障害者と司法の課題に長年取り組んでこられた池原毅和弁護士の企画によって制作された、主として精神障害者のための GH（グループホーム）移転を巡る「施設コフリクト」をテーマにしたドキュメンタリー映画です。

冒頭では、この地域コンフリクトの当事者となった社会福祉法人 SKY かわさきが運営するGHの日常が描かれています。スタッフもメンバーの方も顔を出して登場されています。日中活動の場への参加やささやかなレクリエーションなどの日常生活の場が淡々と描かれています。調子を崩して入院するメンバーさんに対する支援員のケアの場面も収録され、精神障害者の「地域の中での暮らし」の一端を垣間見ることができます。

しかし（撮影当時）7 年前のグループホーム移転を準備していた時期には、「子どもたちの安全が確保できない」「やっと建てたマイホームの地価が下がる」といった移転先住民の声が上がりました。事業者による住民説明会は 3 回にわたって実施されましたが、説明を重ねるほど、理解を得られるその前に、反対派の住民はより結束し反対運動を盛り上げるような結果となってしまいました。しかも、当該GHの移転予定地域には、系列の訪問看護ステーション等によるサービスを受けながら精神障害者当事者も居住しているのです。建設準備スタッフは「運営反対の幟旗が立ち並び、連日ヘイトスピーチのような反対運動がおこる地域で暮らす精神障害者当事者やその家族がどんな思いをしているか」と懸念します。

一方で、反対派の住民側は「障害者を差別しているのではなく、運営側への不信感が反対する主たる理由である」と述べる一方で、説明会においては、「精神障害者は人を殺しても無罪だ」「殺され損じゃないですか」「防犯ビデオをつけてくれるのか」「危険な施設の隣に親を住まわせられない」という差別的な発言が飛び交います。

池原弁護士氏はこうした反対運動について、「(反対する) どんな理由より、本当は『(地域に) 来てほしくない』というのが本音」「犯罪者 100 名のうち精神障害のある人の割合は 0.9%。これが (障害のない) 健常者の場合は 3.3% (日本　2019 年調査)。精神障害者は健常者より犯罪を行う確率は低い」と言及しています。

社会福祉施設の仲介を多く手掛けている会社がこの GH の移転に関わっていましたが、当該不動産会社の社長は「障害者施設があるエリアが、(それだけで) 資産価値が下がることはない」こと、重要事項説明書に「障害者施設が近隣にあること」を記載する必要もない」ということを説明される場面もあります。一方で、別の地域で GH の設立を検討している別法人のスタッフが、「犯罪者や騒ぎを起こす人が来るのではないか」という地域住民の反対が強く、建設が進捗しない状況を語る場面もあります。

障害者施設の設置にあたっては、かつては (自治体からの助成その他の関係で) 「住民同意書」が必要とされた時代があったものの、現在はそれは必要とされていないということが映画では強調されています。しかし事業者は、しかし、GH を設置した後のメンバーさんの生活も考え、地域住民に理解を求める試みを繰り返していきます。

つまり、事業者の説明不足ではなく、障害者に対する「不安」があるから、施設設置に対する反対運動が起きるということが、この映画の訴えるところです。

まずは GH を実際に見てもらい、実際に地域で暮らしている人の暮らしを「自分の目で見て考えること」が、事業者から「説明を聞くこと」以上に、重要であることということも、実感できるところです。

一方で、住民説明会だけではなく、事業者からは近隣の学校等への働き掛けも行われます。「障害者差別に通じる幟旗は通学路にも立ち並んでいます。それらを日常的に見ながら通学することで、子どもたちの内面に障害者を差別する気持ちを育ててしまうことにならないでしょうか」という問題提起が、事業者側から学校に対してなされていきます。その結果、時間はかかったものの、最終的に幟旗は降ろされ、施設移転は実現することになります。

その後 GH 設置・開設後も特に大きな問題は起こっていないということも最後に語られます。GH で暮らす当事者が服薬できなくなったり、症状が悪化した場合は、事業者が迅速に対応している所以です。つまり、「あたりまえの地域生活を支える」ための支援体制が整っているからです。

一方で、退院促進に取り組む精神科病院のスタッフからは、入院治療を続け「今が地域に戻るタイミング」という時点で、地域でグループホームという社会資源があることはとてもありがたいというコメントも収録されています。地域移行が進まない原因の 1 つとして、地域の受入れ体制にあることを実感する場面です。

DVD のパンフレットでは、このグループホームを運営する「SKY かわさき」の三橋理事長の言葉が収められています。

話し合いは (地域住民の施設移転に対する) 抗議集会となり、このままでは理解を得られないと判断し、移転計画を粛々と遂行した。一方で多くの支えも得られ、3 月後には幟旗などはおろされ、半年遅れの移転が実現した。地域コンフリクトの際、私たちは地域住民に「お願い」したのではない。住民、事業者が全力で戦い、事業所は撤退しないということをわかってもらった。それで双方が傷を負ったが分かり合ったこともある。移転が無事終了した時、元町会長からペンキが塗り替えられた頑丈な

鉄製ゴミ箱がグループホームにプレゼントされた。「ゴミ出し」は地域社会の中にあって最も大切な約束事であり、このプレゼントは「僕たちは受け入れている」のサインのように思えた。普及啓発は言葉だけでは進まない。良いところも悪いところも喜びも悲しみも持つ人としてあるがままに姿を現していくところから（始まる）。そしてそれを支える人と人とのつながりから安心が生まれる。

4　『不安の正体～精神障害者グループホームと地域』を見て考えたこと

「不安の正体」とは何かということをまず考えさせられるのは、知識として単に「知っている」「聞いたことがある」というレベルではなく、自分自身が主体的にその事象に関わっていくなど体験を介し、より「深く理解していく」ことが、現実の社会生活では重要になってくることだということです。

そして、これは前回の連載 24 でも述べたことですが、個々の人間がそうした作業のために費やすことのできる時間、「深く理解する」「それを記憶する」ことに要するワーキングメモリーともいうべき部分にもおそらくは制限もある（脳科学に関しては素人なのでこうした表現が正しいかわからないのですが）ことを考えると、**「知っている」ことは実は世界のごくわずかに過ぎない**ということについて、私達人間はより自覚的である必要があり、それが社会で生きていくうえでの謙虚さや他者への気遣い、社会課題への積極的関心につながっていくのではないかと考えています。**「知っている」ことは実は世界のごくわずかに過ぎない**と自覚するによって、初めて自発的に「より深くこの世界を知ろう」という動機付けがなされるのであろうと思われますし、何よりも「自分に知らない世界がある」ということを「知っている」（自分の無知を知っている）ことは、例えば「自分の知らないことを知っている人」と話し合う際に、相手のことを尊重することにつながると考えています。

現在は、インターネットの普及により、様々な情報に手軽にアクセスできるようになりました。しかし、インターネットで簡単に得られる「情報」が本当に正しいかどうかという眼差しを常に持っておかなければ、情報の波の中でおぼれかねません。

インターネットが普及する以前は、より専門性の高い分野に関する情報は、図書館等に足を運び、学会誌や専門誌などのバックナンバーなどを地道に確認する等の作業が必要でした。相応の歴史を持つ学会誌や専門誌の場合、掲載に至るまでに幾度もの査読があり、掲載決定後も編集委員会と筆者がやり取りを重ね、学会や専門誌の紙面にふさわしいものとなるよう作業が重ねられます。私自身も、学会誌に寄稿する立場、査読する立場の双方を経験してきましたが、そうした双方向のプロセスがあってこそ、世に出せる形になっていくということを幾度も経験しました。

一方で、そうしたプロセスを経ずに発信される情報も多くあることは、読者の皆さんもご承知のとおりです。そうした情報を閲覧して、「知ったつもり」になってしまうことは、そのリソースが偏った考え方に基づいていたり、根拠が不明確な場合はより危険です。

そうした意味で、先に紹介した「不安の正体」という映画は、精神障害を持つ人々が地域生活に移行していくことの重要性について、ドキュメンタリーという形ではありますが、実際の映像で知るという貴重な機会であると感じました。

映画のタイトルの「不安の正体」とは、自分たちとは異質である（と感じるもの）を日常生活圏から排除しようとする自分の内にある意識だと私は考えます。「精神障

害者が怖い」という単純な「不安」もあるかもしれませんが、多様性が重んじられる現代社会にあって、自分が、「異質（と感じるもの）なものを認めない」人間であることを自分で認めたり、ましてやそのことを他者に知られたりすることが、「不安の正体」ではないかと私なりに考えています。ゆえに、反対理由が「事業者側の説明不足」といった、より形式的なものにすり替えられていったのでしょう。自分の内面を見つめることで、差別意識に気付いてしまう「不安」があり、そしてそのことで周囲から「差別的な人だと思われる」という「不安」があり、それらを直視しない（できない）がゆえに、こうした「不安」を感じることになった相手を攻撃するに至る、プロセスを描いたものが「不安の正体」という映画だと私は考えています。

自身の内にある「不安」に向き合うことができるようにすること、それについて「悩む」力を持つこともまた、人としての成熟につながっていくと私は考えます。自分の中の「不安」に向き合うこと、そして必要があれば、その「不安」について信頼できる相手に相談したり安全な環境で話し合うこと、それが今の社会に求められる関係性の１つだと考えています。

参考文献：映画『不安の正体～精神障害者グループホームと地域』（2021 年　企画：池原毅和　企画協力　三橋良子　監督　原田基晴　制作・販売：映像グループ　ローポジション）文中では上記 DVD の封入資料内の SKY かわさき三橋理事長の言葉を引用。